**\*\*\*発表番号（記入不要）**

ラオス南部における焼畑民の食料獲得戦略

――食事日誌の副食材料データ分析から――

Food Procurement Strategy of Swidden Agriculturalists in Southern Laos:

Analysis of Side Dish Ingredients Records in Food Diaries

佐藤廉也（大阪大学）＊，蒋宏偉（総合地球環境学研究所），西本太（在ラオス日本大使館），

横山智（名古屋大学）

SATO Ren'ya (Osaka University), JIANG HongWei (Research Institute for Humanity and Nature), NISHIMOTO Futoshi (Embassy of Japan in the Lao PDR), YOKOYAMA Satoshi (Nagoya University)

キーワード：食事日誌，食料獲得，世帯とライフコース，生業，ラオス

Keywords：food diary, food procurement, household and life course, subsistence activity, Laos

Ⅰ　はじめに

　本報告は，2015年5月から2017年11月にかけてラオス南部・サワナケート県セポン郡のアランノイ（Alang Noy）村（第１図）においておこなわれた食事日誌調査のデータを用いて，アランノイで焼畑・採集・漁撈・狩猟・家畜飼養によって生計を維持するモン＝クメール系の少数民族マンコンの人びとの食料獲得戦略を，年間の副食材料の獲得と世帯のライフステージに焦点をあてて分析・考察するものである。本報告ではとりわけ，各世帯において日々獲得される多様な副食材料が「どこで，誰によって獲得されたのか」というデータに注目し，その分析を通して，子どもから大人へ，そして老いていくなかで，個人や世帯がいかなる生活史戦略によって生存を維持しているのかを明らかにしたい。

小農がいかに世帯の経営を維持しているかという問題に関しては，農業経済学におけるチャヤノフの世帯ライフサイクル論がよく知られている（友部 1988）。彼は，子どもが生まれ成長し，また大人が老いていくなかで，食料生産のための世帯労働力と世帯内食料消費の収支バランスがいかに移り変わっていくのかに注目し，小農経営の世帯モデルを作った。さらに2000年代になると，生物人類学の分野において，年齢構成によって決まる世帯の生活収支バランスと出生力との関係を説明する生活史理論が現れ，とりわけ食料獲得活動に果たす子どもの役割が当該社会の出生力を決める要因になる可能性が議論された（Kramer 2005）。本報告は，これらの議論を念頭に，性・年齢による食料獲得に果たす役割の違いと，世帯のステージに注目して考察するものである。

なお，報告者らは2017年の日本地理学会春季大会において，本報告の食事日誌調査の途中報告として，アランノイ村の１年を通じた食事の概要と出生力との関係について報告した。本報告は，その後の日誌調査において追加されたデータや性・年齢によって異なる生業活動の役割に関する聞き取り調査の内容を加え，世帯の食料獲得戦略に焦点をあてて議論を進めようとするものである。

Ⅱ　資料と方法

　アランノイは，29世帯146人（2020年2月現在）からなる村であり，１人の婚入したラオ人女性を除く全員が同じエスニック・グループに属している。ベトナムのフエとセポン・サワナケートを結ぶ幹線道路の近傍に位置しているものの，道路と村とはセポン川で隔てられており，村に入るには渡し舟で川を渡らなければならない。このアクセス上の不利のため，周囲の村に比べ現在でも就学率は低く，毎日の食事の大半は自給的に獲得・生産された食材によって賄われている。

　焼畑で栽培された主食のモチ米が主要なカロリー源である一方，副食材料の多くは集落をとり囲む焼畑・焼畑休閑林や成熟森，セポン川から狩猟・採集・漁撈などの活動の結果得られる。川で得られる淡水魚類や貝・甲殻類，休閑林を含む森で罠などを使って得られる鳥類・齧歯類・両生類，タケノコや野草などの野生植物，キノコ類など，季節を通じて多様な食材が漁撈・採集・狩猟活動によって獲得され，生計が維持される。村の食事は基本的にシンプルで，蒸したモチ米に１〜３品のおかずを添えて食される（第２図・第１表）。副食材料は塩やハーブ類などを使って蒸し・焼き・茹でなどのシンプルな方法で調理され，食用油を利用することもまれで，低カロリーのものが多い。



第１図　調査地の位置（筆者作成）



第２図　副食献立の例（茹でタケノコと唐辛子のディップ）

第１表　高頻度で登場する副食メニュー



　著者らが実施した食事日誌調査では，ラオ語で書かれたシートに毎食の情報を記入してもらう形式で，複数の世帯から性別・年齢の異なるインフォーマントを選定し，データを得た。シートには，日付，食事の時間帯，食事の場所，食べたモチ米の大まかな分量のほか，副食メニュー，副食メニューごとの主に使われた食材とそれを獲った場所，獲った人（世帯員の中の誰が獲ったか、あるいは隣人・親戚などから贈与された場合には贈与者）を記載してもらった。2017年11月までに，合計13,934レコードが得られた。日誌の記録を依頼すると同時にインフォーマントにデジタルカメラを渡して，料理や食材の写真を撮ってもらい，食材・メニューの確認や分量の見積もりに使用した。現地調査時には食前・食後に食事を計量し，１回に食される分量を把握した。

Ⅲ　世帯のライフサイクルと食料獲得戦略

　副食材料を月ごとに集計した結果，淡水魚などのほぼ１年を通じて食卓に供される材料がある一方，タケノコや貝類など，特定の季節に頻繁に食される材料があることがわかった。とくにタケノコは雨季限定の副食材だが，5月から10月にかけては毎日のように食卓にのぼる重要な食材となっている。

　獲得された副食材を世帯別にみると，世帯によって特徴的なパターンがあり，世帯成員の指向性や生業技術が副食メニューに反映されていることが示唆された。例えば，主要な動物タンパク源が，ある世帯では鳥類，ある世帯ではは虫類や齧歯類，別の世帯では主に市場で取り引きされる畜肉に偏るというようにである。前二者は主な獲得者（成人男性）の狩猟活動の指向性によるものと考えられ，畜肉の登場頻度の違いは，社会的な地位や世帯による現金収入の格差を反映したものと考えることもできる。

　そして，10歳代の子どもがいる世帯では，彼らの副食材獲得における貢献度がきわめて大きいことがわかった。とくに男の子は釣りや筌による淡水魚の獲得やカエル獲り，女の子は貝類採集やタケノコ採集において貢献度が高い。こうした世帯では，両親が焼畑や狩猟などに力を注ぐ一方，採集や漁撈においては子どもへの依存度が高く，全体として10歳代の子どもが複数いる世帯では，食料の獲得量が大きい。これらの世帯が獲得したエネルギーの余剰分は，親族間・隣人間の贈与を介して，幼い子どものいる若いステージの世帯や，子どもたちが結婚・独立した後の老夫婦世帯などに振り向けられていると考えられる。本報告の例はKramer (2005)のマヤの事例と同様に，子どもの貢献が生存維持と世代の再生産を支えている事例であると言える。

　当日の発表では，以上の分析の詳細のほか，食事日誌の食材別・調理形態別の集計結果，主要な副食メニューの紹介などもあわせて行う。

【付記】本発表はＪＳＰＳ科学研究費・基盤研究（Ａ）「ラオスの小規模社会集団における人口動態・再生産・生業変化の相互関係の解明」（課題番号25257004，代表・横山智）による成果の一部である。現地における調査はラオス保健省とアランノイ村の人びとの協力のもとにおこなわれた。

【文献】

友部謙一 (1988). 小農経済理論とチャヤノフ理論─課題と展望 (上). 三田学会雑誌，81，505-529.

Kramer, K. L. (2005). *Maya children: Helpers at the farm*. Harvard University Press.